



いま、この時代に、どんな証しを生きるのか

主任司祭 寺西英夫

今年、高円寺教会の保護の聖人、ヨハネ・マリア・ビアンネの誕生二百年に当る。そこで、この「いしずえ」も、ささやかな特集を組むことになった。聖ビアンネ自身については、他の人が書くことになっているので、カトリック教会の聖人崇敬について、一言述べることにする。

聖書によれば、「聖」は神ご自身の特徴である。聖そのものであるお方が、愛ゆえに、人びとに近づき、「ご自分のもの」「ご自分の民」すなわち「聖なる民」とされるのだと、聖書は語っている。全人類をご自分の聖なる民となさって行く神の、この壮大な働きは、「神の聖なる者」(ヨハネ6・49)であるイエズスにおいて、いわばその頂点を垣間見せた。このイエズスを信じ、イエズスから、彼の聖なる(神の)いのちである聖霊を吹きこまれ、洗礼によってキリストと結ばれたすべてのキリスト者、すなわち「わたしたち教会」は、「聖徒(聖人)の交わり」と呼ばれるのである。

従って、「聖人」とは、まず第一に、「神のものとなった人びと」の意味であることを、銘記すべきであろう。

神のものとしていただいた教会は、それゆえにこそ、名実ともに神のものになって行く旅を続ける。そして、その途上において教会は、古くから殉教者をキリストにもっとも近い「聖なるもの」として、崇敬してきた。

「殉教者聖〇〇〇は、あなたの恵みに強められ
いのちをささげて御子キリストを証しました
弱い人間の中に、あなたの偉大な力が示され
十字架の道を行く者の中に
人の知恵をはるかに越えるあなたの愛が輝き出ます」

(殉教者のミサの叙唱より)

この祈りに、はっきりと歌われているように、聖人崇敬とは、同じ旅仲間の一人の上に、特別に現わされた神の偉大な業を讃えることにある。こうして、わたしたちは、さらに旅を続けて行く励ましを受けるのである。

殉教は、必ずしも血を流すことに限らない。迫害の時代を乗り越えた教会は、無血の証し人をも、聖人として崇敬するようになっていった。

すべての人を、神のものとなる神のみ業の中で、ひと足先に、神の聖なる民に召された教会の存在理由は、ただこの証しの使命にある。従って信者はすべて証し人なのであるが、それぞれの時代、それぞれの地方での生き方の中で、すぐれて信仰の証しを立てた人を、殉教者と同じように崇敬したのである。殉教者は全国区、聖人は地方区とでもいえようか。次のような格言がある。「聖人の生涯は、称賛すべきものであるが、真似すべきものではない」。ちょっぴりユーモアのある、いかにもカトリックらしい言葉ではあるまいか。

「すべての司祭の保護の聖人」と言われる聖ビアンネの特集なので、今回は「ミサのはなし」はお休みにして、司祭というものについて、少々考えてみたいと思います。

司祭をどうとらえるか、ということは教会をどうとらえるかということにかかっています。第二バチカン公会議の『教会憲章』は、「神の民である教会」という考えを強調しました。もしキリスト教が人類全体、あるいは社会の中で圧倒的多数であるとすれば、キリスト教は社会そのものであり、人類そのものでもあって、特別に「神の民」ということを意識する必要もないでしょう。「神の民」という考えの背景にはキリスト教が人類の中の一つのグループであるという自覚があります。この「神の民」は、特別に神のものとされ、特別な使命を与えられた集まりです。それはあかしする教会です。社会の中であって社会に向けて語りかけ、働きかけていく教会です。この世界の救いのために祈り、行動する教会です。

「わたしはあなたがたと共にキリスト者であり、あなたがたのために司教である」とアウグスティヌスは言いました。この言葉が教会の司教や司祭（教役者）を考えるための出発点になると思います。司祭もまず第一に信者なのです。その点でほかの人とまったく変わりありません。神から召されていること、福音を告げる使命をゆだねられていること、全世界の人々のために祈ること、秘跡を行い、神の恵みのしるしとなること、これらはみな司祭固有の仕事ではなく、洗礼を受けたすべての人の使命です。すべてのキリスト者が、社会のあらゆる場で、生活の中でキリストに従い、福音のあかしになるという使命をいただいているのです。

その中である人が「司祭」であるということは、キリストに従う「程度」の問題ではなく、単純な役割分担の問題でもありません。司祭のほうが信徒より神に近いわけでもなく、またその逆でもありません。司祭が宣教し、信徒が教会を運営するというわけでもなく、またその逆でもありません。教会が一つになってその使命を果たすための奉仕職として司祭職があるのです。アウグスティヌスの「あなたがたのために」という言葉はこのことを表しています。

神父とはミサを司式する人のことだ。こんなにあたりまえのことではないわけですが、第二バチカン公会議はまさにこの、ミサの司式という点から司祭職をとらえようとしてきました。ミサの中に司祭と教会共同体との関係がはっきりとあらわれています。

「主はみなさんとともに」と司祭が呼びかけると会衆は「また司祭とともに」と答えます。司祭が代表して祈ると一同は「アーメン（そうなりますように）」と答えます。そういう応答の中でミサは成り立っています。司祭個人がミサをささげるのではなく、そこに集まる人みなでささげるのです。みんなが一つになって祈るために誰かが中心にいる必要があります。カトリック教会ではその司式者が叙階された司祭なのです。司祭は祭壇を囲む共同体の中でこそ司祭ですが、ミサを司式する権能はその共同体から来るわけではありません。それは使徒継承の司教団から来るのです。そのことはわたしたちがここでささげるミサが、二千年前から今にいたり、全世界に広がる教会のミサと一つであることを表しています。そしてわたしたちはみな、このミサでキリストに結ばれ、派遣されてゆくのです。

聖ビアンネの祝日にあたり、現代の教会の中で司祭としての奉仕に生きようとする者のためにもお祈りくだされば幸いです。

聖ビアンネ生誕 200 年特集

聖ビアンネのとりつぎを

大河内政三

各グループ、地区会等の会合や活動の始めには、主の祈り、そして終わりには、天使祝詞で終わるのが普通だとおもいます。天使祝詞の後に、聖ビアンネのとりつぎを唱えていない場合は、ぜひこの機会に唱えるようにしたらいかがでしょうか。

このとりつぎの祈りは、長い間、私たちの小教区の伝統でした。この良い伝統を守っていきたいものです。

すべての司祭の保護者、そして私たちの小教区の保護の聖人、聖ビアンネに日本教会の優先課題である福音宣教のためにとりつぎを祈りましょう。

(先唱) 聖ビアンネ

(会衆) 我等のために祈りたまえ。

『アルス』への道 アルスを訪れて アルスへの巡礼 アルスに巡礼して

栗田一雄

南フランスの片田舎、聖ビアンネのゆかりの地、アルスを最初に訪れたのは、高円寺教会が 50 周年のお祝いをした年だった。その後、もう一回訪れているが、やはり、最初のときの印象が強い。そのときは、すべてが手さぐりの旅で、ずいぶん苦勞して、やっとアルスにたどりついた思い出がある。そのときと比べると 2 度目は、場所も、道順もわかっているので、ずっと楽だったが、それでもアルス行きは、そう簡単ではない。

アルスは、今でも、聖ビアンネの時代とほとんど変わらぬほどの片田舎の小さな村で、交通の便など、まるでないといってよい。鉄道は通っていない。自動車道路網からも、かなり離れている。だから、ふつうの観光地図や、ロード・マップには、アルスの名はのっていない。ほとんどの巡礼者たちは、貸切りのバスでやってくる。個人で、ここを訪れる人びとのためには、リオンのカテドラル (セント・ポール教会) の横から、直通のバスが出るが、これも土曜日の午後に 1 本、日曜日に 2 本走るだけだ。クルマを使わないとすると、鉄道を利用するしかない。

アルスに行くには、リオンから列車でパリの方へ向かって 35 km ほどいったところにあるビーユフランスという駅から行くのが、いちばん近いのだが、この駅には急行は止まらないし、利用できる列車は、上下とも 1 日数本しかないから、よほどしっかりと、時刻表を調べておかないと、あとで、めんどうなことになってしまう。

リオンを出ると、列車は美しいサローヌ川を右に見ながら進み、30 分ほどで、ビーユフランス駅につくが、目指すアルスは、ここからさらに 10 km も入ったところだ。ここからはバスもないし、タクシーを使うほかはない。駅前でひろったシトロエンのタクシーは、低いブドー畑、果樹園などのつらなるゆるやかな丘陵をぬける。ゆたかな森林が、あちら、こちらにひとつかたまりに見える。このあたりは、南フランスの典型的な田園地帯といえる。10 分ほど走ると、道路わきに「ARS」と書いた小さな道標、ここで左折するとほどなく、前方の林の間から

教会の十字架が見えてきた。

朝のアルス村は、人影もなく、静まりかえっていた。(この静かさは結局一日中、変わらなかった。目の前にそびえる聖堂は、心に画いていたアルス村の教会より、はるかに堂々として、立派なものだったが、立派に見えたのは、実は、聖ビアンネの死後になってから建て増しとなった背後のバジリカ(大聖堂)の偉容であり、ビアンネ時代からの古い聖堂は、その前の低く、小さい質素な部分だけだ。

石段をのぼって、聖堂に入る。入口の重いドアも、内部の石畳も、バラ窓のステンド・グラスも、ビアンネ時代そのまま、まったく手を加えてないという。この古い聖堂の部分は奥行きが20mほどで、左右に、5つの側方小聖堂が並ぶが、ビアンネ師が自分の守護の聖人、洗者ヨハネにささげた祭壇は左側のいちばん奥にあり、その前に木製の告解室がある。聖ビアンネが、聖堂内で、最も長く時間をすごした場所だ。一段高い説教台も、そのままに残されている。左手にある聖母像の前では、若い青年が、熱心にロザリオの祈りをとなえていた。

さらに進むと、急に天井は高く、左右もひろがって、バジリカの内部に入る。ちょうどイギリスの巡礼団らしい50人ほどのグループがここを訪れており、祭壇の前で、英語のミサがはじまったのでこれに加わらせていただき、しばし、聖ビアンネの霊に祈りをささげた。

聖堂の左側のドアから外へ出ると、細い道をへだてて、同じ敷地内にある、聖ビアンネの司祭館が、これも当時そのままの姿で残されている。ここは、一般に公開されており、巡礼者たちにとっては、見落してはならないところだ。その前の道は昔はもっと広がった。この場所は、毎晩、大ぜいの人びとが待っていたところだ。夜9時になると、聖堂のとびらが閉ざされるので、ビアンネ師に告解をきいてほしいとねがう人びとたちは、番号札をもらって、ここで翌朝まで待ったのだという。

司祭館は、石造りの質素な2階建て。木戸をくぐると、ネコのひたいほどのせまい中庭に出る。師が毎日使っていた古井戸が一隅に残っている。その周囲には、赤い草花が生いしげっているが、当時は、2、3本の樹木も生えており、ビアンネ師はここを『私の、ブローニュの森』とよんで、愛されたという。

建物の中に入ると、細い廊下をつたいながら、全部の部屋の内部が見られるようになっている。1階の最初の部屋は、師の前任者が食堂として使ったところだ。暖炉の上には、聖堂で使い古したランプがおいてある。そのわきには、少しこげたベッド。これはもと2階にあったが、1857年におきた不審火でこげたものだという。この部屋には、簡単な告解台もあるが、これは師自身が毎日神と対話した場所でもある。

階段の手前が炊事場だ。煉瓦を積んだかまどの横には、カギ棒につるされて、“有名な”ビアンネ師のなべがぶらさがっている。師は、1週間のいもをこのなべで煮て、朝と晩に一片のパンといっしょに食べたのだ。

壁には、大型のフライパンがかかっているが、これは、麦でパン・ケーキ(バターも塩も入らない)をつくる時に使ったものである。部屋の中央には、簡単なテーブルと椅子がひとつずつ。わずかの食器類も、並べられている。

2階に上がってみよう。寝室は1895年8月4日、ビアンネ師が息を引きとった、その日のままの状態に保存されている。師が、“天使のように、おだやかに”息を引きとったベッドには、その夜の毛布とシーツがそのままにかけてある。横のナイト・テーブルには、老眼鏡、そして、師が毎夜、数ページずつ欠かさず読みつづけていた『聖人伝』が開かれたまま、おかれている。1840年の5月1日、師のもとに聖母が現れたというのも、この部屋である。巡礼者たちが、いちように深い祈りを捧げる場所である。

2階にはほかに、書斎、展示室があり、生前に師が使った祭服、スータン、聖書、祈とう書、ロザリオなどをはじめ、身の回りの品々が見られる。

司祭館をあとに、教会のまわりを数分歩き回ってみたが、一步出ると、あたりは一面の麦畑。

昔のままののどかな農村の風景がひろがっていた。今でもアルス村は人口約 550 人ほどという。たのんでおいたタクシーが、やっと迎えにやってくるので帰りは、ビーユフランスの町の街中でおろしてもらった。ひと休みしたレストランで飲んだ赤ワインのなんとすばらしかったこと…。ビーユフランスの町は、有名なブルゴーニュ・ワインの産地の中央部にあり、ワインの集散地として知られている。

聖ビアンネの生涯

芝崎春樹

小生が初めて聖ビアンネに出会ったのは戦前の高円寺教会においてであった。教会に入ると正面左に等身大の、うっすらと彩色を施した聖人の像が立っており、子供の目には生きた人間のように見え、少し気持ちが悪かった。

二回目の出会いは今から 10 年ほど前、シャモニーからパリへの帰途リヨン郊外のアルスを訪れたときのことである。そのとき感じたのは巡礼地で受けるあの何とも表現の仕様のない感動と、そして聖人の生活の貧しさであった。

そして三回目の出会いは今回聖人の生涯について何か書くように言われ、普段は読んだこともない聖人の二、三の伝記をとおしてである。

聖ビアンネ、正確にはジャン・バチスト・マリ・ビアンネは 1786 年 5 月 8 日、リヨンの郊外のダルディイ村で自作農の次男として生まれた。小さいときの呼び名はジャン・マリである。(堅信でジャン・バチスト・マリとなる。)

彼が 3 歳のときフランス革命が起こり、その波は教会にも押し寄せた。革命政府は司教、司祭たちに革命政府への忠誠を誓わせ、誓わない司教、司祭たちは逮捕され、24 時間以内に処刑された。革命政府はローマとの関係を断ち切り、勝手に司教まで任命し始めた。ダルディイ村の教会の司祭も時流に抗し切れず、言われるがままに革命政府に忠誠を誓い、そして通常どおりミサを挙げ、御聖体を授けていた。ビアンネ家の人たちも、もちろん 4 歳になったジャン・マリもそのミサにあずかっていた。

やがて村の教会も閉鎖されたが、命懸けで革命政府への忠誠を拒否した司祭たちは地下にくぐったまま司祭としての活動を続け、夜に乗じてひそかに信者の家を訪れ、同じくひそかに集まって来る信者たちのために本当のミサを挙げた。ビアンネの家でも夜遅く声を押し殺してのミサが行われることもあったし、また革命政府及びその密告者たちから追われる司祭たちをかくまったこともあるという。ジャン・マリ、後の聖ビアンネはその時代のことを終生忘れなかった。彼の激しい信仰はそのとき芽生えたのかもしれない。

1799 年、彼が 13 歳のとき初聖体を受けたが、彼はそのとき、将来司祭になり、たくさんの魂を救うのだ、と両親に漏らしている。1799 年といえば革命が起きてから 10 年も経っており、ナポレオンが革命を收拾した年である。やがてナポレオン政府がローマと仲直りするの間近かであるが、初聖体は鎧戸をおろした民家で行われ、外には数人の農夫が見張りに立っていた。堅信を受けたのはナポレオンがローマと仲直りした後で、彼は 21 歳のときである。

父親は彼を自分と同じく農夫にしようとはほとんど勉強させなかった。当時としてはごく当たり前のことであったろう。しかし彼は 17 歳のとき初めて母親に司祭になりたいと打ち明け、母親はたいそう喜んでくれた。しかし気がついてみると、彼はほとんど何も勉強していない。

彼は神学校に入って神学、哲学、ラテン語を学び始めたが、そこから彼の苦しみが始まった。今で言う「落ちこぼれ」か、要するにできないのである。彼は自分でこう言っている。「神は私の支えとなるようなものを何も与えてくださらなかった。才能も、学問も、英知も、力も、徳も与えてくださらなかった。」特に記憶力が悪く、当時の司祭に不可欠のラテン語の複雑な文法の規則を覚えられないのである。

あるときなど年下の同級生に教えてもらっているうちに、彼があまりできないのでその同級

生にひっぱたかれたこともあったという。彼はたいそう激しい感情の持ち主であったから、自分の手を押えるのに苦労したのであろう。逆に自分が悪かったと平謝りに謝ったという。

そんなにできの悪い神学生の聖ビアンネも時代の要請で司祭になれたのだから不思議である。29歳のときである。革命とそれに続くナポレオン戦争で司祭が不足していたのである。そこでラテン語はできないが、努力は認めるとしてグルノーブルで叙階された。ただし罪の赦しを与える権限は追って沙汰があるまでおあずけという条件つきである。

それが後年アルスの主任司祭になってから、睡眠時間はたったの2時間で、一日10時間、一説では17時間も告白室に閉じこもり、聖人の徳を慕って全ヨーロッパから集まる信者たちの告白を聞き、罪の赦しを与えていたというからなんと皮肉ではないか。

1818年2月、あと少しで32歳になろうとしていたとき、彼はアルス村の主任司祭に任ぜられ、着任した。結局彼は73歳で亡くなるまでの41年間を当地の司牧に当たった。この長い間の生活は聖人らしい、厳しい、そして立派な毎日ではあるが——例えば小さな鉄の玉のついた鎖で我が身を打つとか——現代の我々から掛け離れているので、ここでは割愛したい。御興味のある方は聖人の伝記を参照されたい。

ただアルス時代に動機は何であれ、二度も任地から逃げ出そうとしたり、また、後年助任司祭との仲がうまく行かなかったりした。しかし日ごろは衣食住を切り詰め、貧しい人たちに惜し気もなく分け与えていた。また、説教はずいぶん長くて、信者はあくびをしたり、中には居眠りしたりする者もいたが、聖人は説教の原稿をきちんとつくり、それを覚えるために外出の道すがら復唱していたという。

それでは現代に生きる我々はこの聖人をどう捉えたらよいのか。今年6月29日付のカトリック新聞によれば、教皇ヨハネ・パウロ二世が9月に予定されている訪仏の際、アルスを訪れ、聖ビアンネの生誕二百年祭を祝うことになっているが、リヨン教区の司祭団は、聖ビアンネの生活は第二バチカン公会議以後の司祭職のあり方にそぐわない、として教皇の訪問に難色を示しているという。それも一つの見方であろう。

しかし別の見方もできよう。聖ビアンネ自身の言葉に耳を傾けてみよう。彼は自分自身についてこう述べている。「自分の悪徳は一、無知、二、食いしん坊、三、偽善である」と。また「自分はいつも傲慢と絶望に悩まされている。」という。もちろんこれらの言葉は謙遜から出たものであろう。

しかし同時に人間的な弱さをさらけだしてくれている。なんと人間的な聖人であろう。彼が小生と異なっているのは人一倍の神への愛と並外れの努力であろう。そして清貧と周囲の人たちへの愛情の深さである。これらのことは時代を超越して我々に語りかける力があると思うのは小生だけであろうか。神はこの素朴な青年を司祭に選び、たくさんの欠点をもった人間を聖人とすることにより、その栄光を現したのであろう。

最後に、1925年聖ビアンネを聖人の列に加えたのは教皇ピオ十一世であり、同教皇は4年後の1929年、同聖人を全世界の司祭の保護の聖人と定めた。

参考文献

LE CURÉ D'ARS, JEAN SERVEL O. M. I. ET RENÉ PERRIN, EDITIONS DU CHALET, LYON, 1958 (栗田氏所蔵)

LA VIE PRODIGIEUSE DU CURÉ D'ARS, MICHEL DE SAINTE PIERRE, GALLIMARD, PARIS, 1973

『聖ビアンネ』, 戸塚文卿著, 中央出版, 1963年, グロリア文庫

「カトリック新聞」1986年6月29日号

THE FRENCH REVOLUTION, CHRISTOPHER HIBBERT, PENGUIN BOOKS, 1982

聖ビアンネ語録

「神父様、なぜお祈りするときは小声でして、説教のときだけあんなに大声をだすのですか。」とある信者が聞いた。

「それは、説教しているときは、耳の遠い人や、いねむりをしている人に話をしているのだが、お祈りを聞いてくださる神様は耳が遠くないからね。」

「神父様、なぜそんなに泣くのですか。」とある人がたずねた。

「私が泣くのは、あなたが泣かないからです。」

「心のきよい人は愛さずにはいられない。なぜなら、その人は神ご自身にほかならぬ愛のみなもとを発見したからだ。」

「私は教会の主任司祭でありたくない。けれどもミサをささげることができるために、司祭でありたい。」

1850年ごろには、ビアンネ師はフランスで最も有名な司祭になっていた。新司教がビアンネ師をむりやり教区の名誉参事に任命し名誉参事のカマイユ（フード付きコート）を贈った。ビアンネ師は10日もしないうちに司教に礼状を書いた。

「司教様、ご親切にも私にくださったカマイユは、私の大きな喜びになりました。なぜなら、私はある基金を集めておりましたので、それを50フランで売ったからです。この値段に私は満足しました。」

ナポレオン三世より、シュバリエ・ド・ラ・レジオン・ドヌール勲章を授けられると聞いたビアンネ師は、使いの人にたずねた。

「その勲章には、貧しい人にあげられる年金はついていますか。」

「いいえ、それはただ名誉だけです。」

「貧しい人になんにもならなければ、どうか皇帝におことわり申し上げると伝えてください。」

「この人がアルスの司祭？」と、幻滅を感じたパリから来たある貴婦人が言った。

「どうも、お気の毒さま！あなたと、ソロモン王をおとずれたシパの女王とはちょうど正反対ですね。女王はすぎたほうに意外でしたが、あなたはたらぬほうに意外なのです。」と、おどけた顔つきでビアンネ師は答えた。

ある婦人がビアンネ師に「遺物」をこうた。

「あなたをご自分でお造りになったらいいでしょう。」と師は答えた。（あなたが聖人になったらいいでしょうという意味）

ふとった一司祭が、「神父さん、私はあそこに行くのに少しあなたをあてにしていますよ。あなたが天国に行くとき、私はあなたのスータンにしがみついていますよ。」と言うとビアンネ師はにやにや笑って、

「お気をつけなさいよ。天国の入り口はせまいから、へたすると、ふたりともはいれないことになるかもしれません。」

おしゃべりな婦人に、

「あなたは一年のどの月にいちばんだまっておいでですか？それは二月ですよ。なぜなら他の月より三日、日数が少ないから。」

（文責 三枝明夫）

主の栄光が聖ビアンネに現われた時代

ヨーロッパ・アメリカ	聖ビアンネ	日本・アジア
1770年代 イギリス産業革命進行		1772 田沼意次、老中となる
1776 アメリカ独立宣言		1778 ロシヤ人、国後島に来る
	1786.5.8. 聖ビアンネ誕生	
1789 フランス大革命起こる	革命政府による教会閉鎖	1787 松平定信、儉約令を発す
1793-94 フランス恐怖政治	1794 8歳 読み書きなどの初等教育	1792 ロシヤ使節根室で通商要求
1799 ナポレオンのクーデター	1799 13歳 初聖体	1797 イギリス船、蝦夷地に来航
	1801 17歳 神学校希望、父の反対	1801 朝鮮、キリスト教徒大迫害
1804-1814 皇帝ナポレオン1世	1803 19歳 教会付属バレー師私塾入学	1804 ロシヤ使節長崎で通商要求
1805 トラファルガルの海戦	1807 21歳 堅信、堅信名洗者ヨハネ	1808 江戸湾沿岸に砲台起工
1812 ナポレオン、ロシヤ遠征失敗	1812 26歳 小神学校入学、最年長	1811 ロシヤ軍艦長を国後島で捕える
	1813 27歳 大神学校退学を命じられる	
1814-1815 ウイーン列国会議	1814.7.2. 28歳 副助祭叙階	1814 伊能忠敬、大日本沿海輿地全図
1815 ワーテルローの戦	1815.8.13. 29歳 司祭叙階	1815 杉田玄白、蘭学事始
1818 アーヘン列国会議	1818.2.10. 31歳 アルス村の主任司祭	1819 イギリス、シンガポール領有
	1822 聖母の脇祭壇を建立	
1823 アメリカ・モンロー主義宣言	1823 洗者ヨハネの脇祭壇を自費で建立	1823 シーボルト長崎に来る
1825 ブラジルの独立	1824 無料女子小学校開校	1825 異国船打払令
	1826 ごろまでに、聖堂を現存の形に整える	
1827 フランスのアルジェリア遠征	1827 孤児のための“摂理の家”を建設	1827 頼山陽、日本外史
1828-29 ロシヤ・トルコ戦争	1829 一握りの麦が穀倉一杯になる奇跡	
1830 ベルギー独立宣言	1830 アルス村に巡礼が来るようになる 着任10年あまりでアルス村の改革が成る	1832-38 天保の大飢きん
1837 イギリス女王ヴィクトリア	1836 小教区を無原罪の聖母にささげる	1837 大塩平八郎の乱
1839 ベルギーの永世中立保障	1840 聖母が師と一婦人に現われる	1840-42 アヘン戦争
	1843 57歳 肋膜炎と肺炎の大病	1841-43 水野忠邦、天保の改革
1846-48 アメリカ・メキシコ戦争	1848 62歳 “摂理の家”の経営移管	1853 ペリー浦賀来航
	1859.8.4. 帰天 73歳 2ヶ月 27日	1859 安政の大獄
1860 リンカーン、大統領に当選	アルスの主任司祭として 41年 5ヶ月 23日	1865 大浦天主堂献堂キリシタン発見
1925 ロカルノ条約	1925 教皇ピオ十一世により列聖	1925 治安維持法、普通選挙法(大.14)